



## 村上春樹『1Q84』を読んで

村上春樹さんの新書『1Q84<ichi-kew-hachi-yon> a novel BOOK1 4月 - 6月』と同『BOOK2 7月 - 9月』を読みました。

村上さんの小説を読むのは初めてです。発売以来話題になっていたこともあって一度は村上小説を読みたいと思っていました。

これからこの本を読もうとされている方は、以下の文を読まない方がいいかもしれませんのでご注意を。(^-^)

以前、村上さんの『アンダーグラウンド』という分厚いルポ形式のノンフィクション文学作品を読んだことがあります。オウム真理教による「地下鉄サリン事件」の被害者などのインタビューをまとめたものであり、実は今回の『1Q84』にはこのことが大きく影響していると思われました。

『1Q84』を何かに取り憑かれたように一気に読みました。主人公と思える女性「青豆」と男性「天吾」を中心にしながら、各章毎に物語が展開されていきます。初めはこの2人に共通する接点はなく、淡々としながらも双方の行方に興味が引かれていきます。やがてこの2人を結びつける展開になっていくのですが、どうもよくわからぬままに物語は閉じられています。

この小説で村上さんは何を言おうとしていたのか。オウム真理教による「地下鉄サリン事件」が小説の題材であるとしたら、現代社会における人間と宗教との関係性、そしてカルト教団化していく宗教団体と狂信的な世界に入っていき若者を生む社会の歪みなど、まさに現代社会に対する警鐘として『1Q84』を書かれたのか。

1984年を舞台に『1Q84』の世界を描かれた。それは今、私たちの近くにその世界があるのかも知れないという社会を描いたのかと思いました。この小説は、読み手によっていろんな読まれ方がされるでしょう。この社会について考えることを求めている作品ではないかという気もしました。

2刊で1,000頁を超える長編で、2刊あわせると200万部を超えて発行されている大ベストセラーです。『BOOK1』と『BOOK2』とあるので、この続き『BOOK3 10月 - 12月』...があるのかと思いますが、どうなのでしょう。小説に出てくる数々のクラシック曲を聴きながらの緑陰読書はいかがでしょう

